

中学生の社会的スキルと攻撃受動性 および心理的リアクタンスとの関連

小林 祐子¹⁾, 佐久間 美百²⁾, 山田 浩平³⁾

【要旨】本研究は、社会的スキルと攻撃受動性および心理的リアクタンスがどのように関連しているかを検討するために、千葉県の中学生336人を対象に無記名自記式の質問紙調査を行った。主な結果は、社会的スキルと攻撃受動性との関連に関しては、男女ともに社会的スキルが低い者は高い者に比べ、攻撃受動性尺度の「合計得点」及び下位因子の「直接的な攻撃受動」「間接的な攻撃受動」の得点が有意に高く、攻撃を受けやすいことが示唆された。これに加え男子は、社会的スキルが高い者は低い者に比べ、「勉強志向・競争心」の得点が有意に高かった。また、社会的スキルと心理的リアクタンスとの関連については、男女ともに社会的スキルが低い者は高い者に比べ、リアクタンス尺度の「合計得点」および下位因子の「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「感情的反発」、「脅威の感受性」の得点が有意に高かった。これに対し、心理的リアクタンスの下位因子である「意思決定の自由」のみは、社会的スキルが高い者は低い者に比べて有意に得点が高かった。

キーワード：社会的スキル、攻撃受動性、心理的リアクタンス

I. 緒言

近年、少子高齢化、情報化などによる社会環境や生活環境の急激な変化は、子どもの心身の健康にも大きな影響を与えており、学校生活においてもいじめ、不登校、性の問題行動や薬物乱用などの課題が顕在化している¹⁾。さらに、いじめが背景事情として認められる生徒の自殺事案が発生し、大きな社会問題となっている。

平成23年度の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校におけるいじめの認知件数の合計は、70,231件（前年度77,630件）であった。また、いじめの認知率（1,000人当たりの認知件数）は、中学校が最も高く8.6%であり、次いで小学校4.8%、高等学校1.8%の順であった。さらに、学校内外における暴力行為発生率（1,000人当たりの発生件数）も、中学校が最も高く10.9%であり、次いで高等学校2.8%、小学校1.0%の順であった²⁾。これらの調査結果から、いじめなどの不適応行動は校種

別にみると、特に中学校で顕著であるといえる。

このいじめに関連するキーワードとして攻撃受動性が挙げられる。攻撃受動性とは他者からのいじめ等の攻撃行動の受けやすさであり、原ら（2006）³⁾は「いじめられやすさを示す指標である」と述べている。また、Olweus（1993）⁴⁾はいじめを受けた生徒はセルフエスティームの低下が持続的・長期的になりやすく、また抑うつ的になりやすいことを報告している。これは、いじめを受けることは子どもの健全な育成を阻害することにつながることを意味しており、不適応行動としてのいじめを予防していくためには、攻撃受動性を低くする必要があると考えられる。

これとは別に、中学生が健康にとって望ましい行動をとるには、いじめ等の不適応行動に加えて、喫煙・飲酒などの危険行動にも適切に対応していくことが肝要となる。野津ら（2006）⁵⁾の研究によると、青少年の危険行動は男子あるいは女子のどちらか一方に偏るのではなく行動によって異なることを報告している。一方、山田ら（2012）⁶⁾は「危険行動に対する科学的知見を教示したとしても、思春期は友人関係が壊れることを恐れるあまり、ピアプレッシャー（友人からの圧力）を受けやすく、友人からの誘いを断れず、喫煙・飲酒・薬物乱用・交通安全上の行動・性的行動・暴力な

2013年12月31日受理

¹⁾ 愛知県西尾市立寺津小学校

²⁾ 愛知県三好市立南中学校

³⁾ 愛知教育大学養護教育講座

どの危険行動を選択してしまいやすい」と述べている。さらに、保坂(1998)⁷⁾は「ピアプレッシャーが万引きや喫煙などの反社会的な集団行動やいじめの起因となる」と述べている。これらの報告は、喫煙・飲酒・薬物乱用・交通安全上の行動・性的行動・暴力などの危険行動にはピアプレッシャーが大きく関与していることを意味しており、このピアプレッシャーに対して適切に対応していくためには、心理的リアクタンスが有用であると考えられる。牧野(2000)⁸⁾は、心理的リアクタンスを、「本来自由であるはずの自分の態度や意見が異なる方向に導かれる圧力をはねのける動機である」と述べており、この心理的リアクタンスが喚起されることで、危険行動の予防につながると推測される。

これまでの先行研究^{9) 10)}によるといじめなどの不適応行動や、喫煙・飲酒・薬物乱用・交通安全上の行動・性的行動・暴力などの危険行動にはライフスキルや社会的スキルなどのスキル教育が効果的であることが報告されている。これらのうち社会的スキルについて、菊池ら(1998)¹¹⁾は「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル」と定義している。さらに、社会的スキルが低い者は、攻撃受動性が高いことが報告されている³⁾。また、ピアプレッシャーは友人からの圧力であるため、社会的スキルと何らかの関連があると推測される。さらに近年、学習可能な社会的スキル(相川, 2001; Argyle, M., 1988など)¹²⁾が注目されており、学校現場で社会的スキルを取り入れる教育活動が見受けられ、渡辺ら(2003)¹³⁾は実際に社会的スキル形成のための教育によって同スキルが向上することを報告している。これらのことから、教育によって社会的スキルを意図的・積極的に向上させることができれば、攻撃受動性や心理的リアクタンスを変化させることができると考えられる。

そこで本研究では、不適応行動や危険行動に適切に対応するための基礎資料を得るために、社会的スキルが攻撃受動性と心理的リアクタンスにどのように関連しているのかについて検討することを目的とする。

II. 方法

1. 調査時期・対象者

2012年11月下旬に、千葉県内の公立中学校に通う中学生442人(1年234人, 2年208人:男子229人, 女子213人)を対象に短学活の時間を使い、自作の無記名自記式の質問紙調査を集合形式で行った。調査を行う際は、プライバシーを十分に配慮し、教員による机間支援をしないようにした。な

お、調査は授業の一部を利用して実施したため、その実施にあたっては対象中学校の校長及び教務主任、学級担任の承諾を得て実施した。さらに、調査票はその冒頭に本調査の趣旨を記載し、対象者本人が調査への協力に同意するか否かを答える回答欄を設け、これに回答した上で各質問に答えてもらうようにした。アンケート調査協力の同意が得られなかった場合には、その場で調査を打ち切ることができるように配慮した。

回答が得られたのは441人であり、有効回答数は336人(1年生188人, 2年生178人:男子190人, 女子176人)で、有効回答率は82.8%であった。

2. 調査内容

調査内容は、①基本的属性(学年・性別)、②中学生用社会的スキル尺度25項目、③リアクタンス特性尺度23項目、④攻撃受動性尺度19項目である。

2. 1. 中学生用社会的スキル尺度

戸ヶ崎ら(1997)¹⁴⁾が開発した中学生用社会的スキル尺度(以下、社会的スキル尺度)を用いた。この社会的スキル尺度は、「関係向上行動(10項目)」、「関係参加行動(8項目)」、「関係維持行動(7項目)」の3つの下位因子、全25項目で構成されている。評価は「1全くあてはまらない」～「4よくあてはまる」までの4件法である。得点が高いほど社会的スキルが高いといえる。例えば、「1. 友だちが失敗したら、はげます方だ」という項目に対して「4よくあてはまる」と回答するほうが、社会的スキルが高いことになる。また、下位因子である「関係参加行動(11～18)」、「関係維持行動(19～25)」は、全て逆転項目である(得点範囲25～100点)。

一方、「関係向上行動」とは、困っている友だちを助けることや友だちを励ますことなど、他者支援や思いやりのある行動を、「関係参加行動」とは、遊んでいる友だちの中に入ることや友だちに気軽に話しかけることなど友だちとの関係づくりに関する行動をさしている。また、「関係維持行動」とは、友だちに乱暴な話し方をしないことや友だちの邪魔をしないことなど、友だちとの関係を保つための行動をさしている。

2. 2. リアクタンス特性尺度

高木ら(2005)¹⁵⁾が開発したリアクタンス特性尺度(以下、リアクタンス尺度)を用いた。これは、心理的リアクタンスの喚起されやすさを測定する尺度である。このリアクタンス尺度は「直接的な自由回復の行使(6項目)」、「意思決定の自由(8項目)」、「感情的反発(6項目)」、「脅威の感受性(3項目)」の4つの下位因子、全23項目で構成されて

いる。評価は「1全くあてはまらない」～「7非常によくあてはまる」までの7件法である。得点が高いほど心理的リアクタンスが喚起されやすいといえる。例えば、「1. 人からやれと言われたことはあえてやらない」という項目に対して「7非常によくあてはまる」と回答する方が、心理的リアクタンスが高いことになる(得点範囲23～161点)。

なお、「直接的な自由回復の行使」とは、他者からの自由制約に対する自由回復を目指した行動に関するものであり、「意思決定の自由」とは、自分の自由への干渉に対する感情的反発や抵抗に関するものである。また、「感情的反発」とは、他者からの影響に対し、内的な反発を示すものであり、「脅威の感受性」とは、他者の干渉や規則に対する認知に関するものである。

2. 3. 攻撃受動性尺度

原ら(2006)³⁾が中学生に適用して妥当性を検討した攻撃受動性尺度を用いた。これは、他者からの攻撃行動の受けやすさを測定する尺度である。この攻撃受動性尺度は、「直接的な攻撃受動(7項目)」「間接的な攻撃受動(5項目)」「勉強志向・競争心(7項目)」の3つの下位因子、全19項目で構成されている。評価は「1全くあてはまらない」～「5大いにあてはまる」までの5件法である。得点が高いほど攻撃受動性が高いといえる。例えば、「1. 人から怒鳴られたりすると、言い返せないことがある」という項目に対して「5大いにあてはまる」と回答する方が、攻撃受動性が高いことになる(得点範囲19～95点)。

3. 分析方法

データの分析にはコンピュータ用統計ソフトSPSS for Windows 16.0Jを使用し、社会的スキル尺度とリアクタンス尺度および攻撃受動性尺度との比較について、一元配置分散分析及び多重比較(Tukey), t検定を行った。

Ⅲ. 結果

今回用いたそれぞれの調査票(社会的スキル尺度、攻撃受動性尺度、リアクタンス尺度)について、男女間及び学年間の差をみるためにt検定を行ったところ、学年間について大きな差はみられなかった。男女間については、社会的スキルに有意差がみられたため、以後の分析は男女を別に行なった。

1. 社会的スキル尺度の得点

社会的スキル尺度の「合計得点」の平均値は、男子79.1点(±8.15)、女子81.0点(±6.85)であっ

た。下位因子の平均値は、「関係向上行動」では男子が30.8点(±4.23)、女子が31.6点(±3.79)、「関係参加行動」では男子が28.3点(±4.12)、女子が28.7点(±3.44)、「関係維持行動」では男子が20.1点(±3.22)、女子が20.6点(±2.46)であった。これらの値について男女間の差を比較したところ(対応のないt検定)、女子は男子に比べて、「合計得点」が有意に高く($t=-2.37$, $p=.01$)、下位因子の「関係向上行動」も有意に高かった($t=-2.03$, $p=.04$)。

一方、学年別でみると、1年生の「合計得点」は30.9点(±4.41)、2年生の「合計得点」は31.5点(±3.58)であり、学年間の差を比較したところ有意差はみられなかった($t=-1.29$, $p=.213$)。

2. 攻撃受動性尺度の得点

攻撃受動性尺度の「合計得点」の平均値は、男子が45.5点(±11.18)、女子が47.0点(±11.77)であった。下位因子は、「直接的な攻撃受動」では男子16.4点(±5.86)、女子17.1点(±6.04)、「間接的な攻撃受動」では、男子が9.7点(±4.52)、女子11.0点(±4.89)、「勉強志向・競争心」では男子が19.4点(±4.69)、女子が18.9点(±4.81)であった。これらの値について男女間の差を比較したところ、女子は男子に比べて、下位因子の「間接的な攻撃受動」の得点が有意に高かった($t=-2.72$, $p=.007$)。

一方、学年別で見ると、1年生の「合計得点」は47.5点(±11.77)で、2年生は、44.7点(±11.01)であり、1年生は2年生に比べて「合計得点」が有意に高かった($t=-2.36$, $p=.019$)。

3. リアクタンス尺度の得点

リアクタンス尺度の「合計得点」の平均値は、男子が80.9点(±25.03)、女子が78.1点(±24.04)であった。下位因子の平均値は、「直接的な自由回復の行使」では男子15.8点(±7.77)、女子14.6点(±7.16)、「意思決定の自由」では、男子31.8点(±9.59)、女子30.4点(±8.87)、「感情的反発」では男子24.4点(±9.11)、女子23.9点(±9.23)、「脅威の感受性」では、男子8.9点(±4.36)、女子9.1(±4.20)であった。

学年別で見ると、1年生の「合計得点」の平均値は79.3点(±24.81)、2年生は79.8点(±24.37)であった。これらの値について男女間および学年間において差をみたところ、有意な差はみられなかった($t=-.17$, $p=.863$)。

4. 対象者の社会的スキルの群分け

対象者の社会的スキル尺度の「合計得点」を、平均値と標準偏差を基準にMean + 0.5SD以上の者をHigh群、Mean - 0.5SD以下の者をLow群、それ以外をMiddle群の3群に分類した。なお、それぞれの群の割合は、男子ではHigh群32.1% (61人)、Middle群41.1% (78人)、Low群26.8% (51人)であり、女子ではHigh群35.8% (63人)、Middle群31.8% (56人)、Low群32.4% (57人)であった。

5. 社会的スキルと攻撃受動性との関連

社会的スキルと攻撃受動性との関連性を検討するにあたり、社会的スキルを得点別に群分けしたものを目的変数、攻撃受動性尺度の「合計得点」及びその下位因子の得点を説明変数として、一元配置分散分析を行った。

その結果、図1に示すように、「合計得点」については男子[F (2,187) =10.09 (p=.00)], 女子[F (2,173) =8.76 (p=.00)]ともに有意差がみられた。そのため、さらに多重比較 (Tukey) を行ったところ、男子においてLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (p=.00) (p=.01), 女子においてもLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高かった (p=.00) (p=.013)。

次に下位因子である「直接的な攻撃受動」についてみると、男子[F (2,187) =10.48 (p=.00)], 女子[F (2,173) =7.76 (p=.01)]ともに有意差がみられた。そのため多重比較を行ったところ、男子においてLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (p=.00) (p=.01), 女子においてもLow群はHigh群よりも有意に得点が高かった (p=.00)。

また「間接的な攻撃受動」についても、男子[F (2,187) =32.36 (p=.00)], 女子[F (2,173) =12.42 (p=.00)]ともに有意差がみられた。そのため多重比較を行ったところ、男子においてLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (ともにp=.00), 女子においてもLow群はHigh

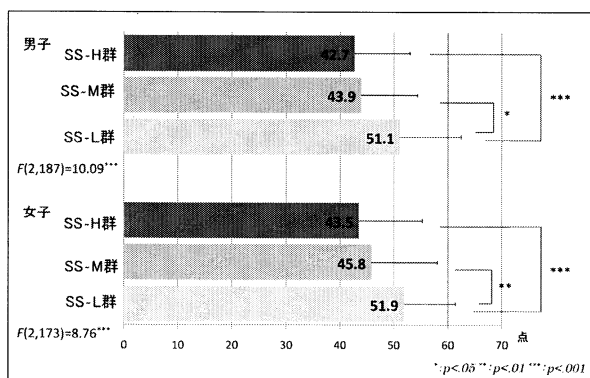


図1 社会的スキル各群別にみた攻撃受動性の得点

群およびMiddle群よりも有意に得点が高かった (p=.00) (p=.03)。

さらに「勉強志向・競争心」についても、男子[F (2,187) =4.48 (p=.01)], 女子[F (2,173) =.62 (p=.583)]ともに有意差がみられた。そのため多重比較を行ったところ、High群はMiddle群・Low群よりも有意に得点が高かった (p=.02) (p=.036)。

6. 社会的スキルと心理的リアクタンスとの関連

社会的スキルと心理的リアクタンスの関連性を検討するにあたり、社会的スキルを得点別に群分けしたものを目的変数、リアクタンス尺度の「合計得点」及びその下位4因子の得点を説明変数とし、一元配置分散分析を行った。

その結果、図2に示すようにリアクタンス尺度の「合計得点」については、男子[F (2,187) =26.17 (p=.00)], 女子[F (2,173) =16.99 (p=.00)]ともに有意差がみられた。そのため多重比較を行ったところ、男子においてLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (ともにp=.00), Middle群はHigh群よりも有意に得点が高かった (p=.03)。女子においても、Low群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (p=.00) (p=.008), Middle群はHigh群よりも有意に高かった (p=.02)。

次に、下位因子である「直接的な自由回復の行使」についてみると、図3に示すように、男子[F (2,187) =25.37 (p=.00)], 女子[F (2,173) =30.65 (p=.00)]ともに有意差がみられた。そのため多重比較を行ったところ、男子においてLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (ともにp=.00), Middle群はHigh群よりも有意に得点が高かった (p=.05)。女子においても、Low群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (ともにp=.00), Middle群はHigh群よりも有意に得点が高かった (p=.01)。

また「感情的反発」についても、男子[F (2,187)

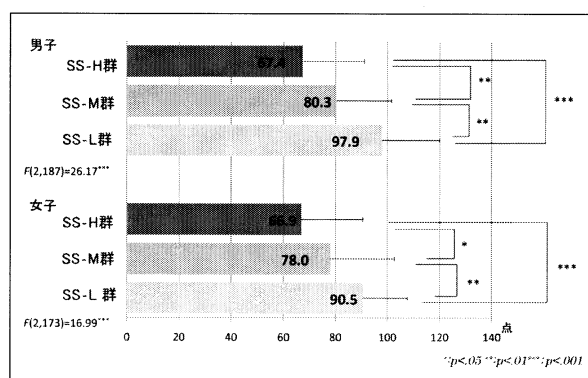


図2 社会的スキル各群別にみた心理的リアクタンスの得点

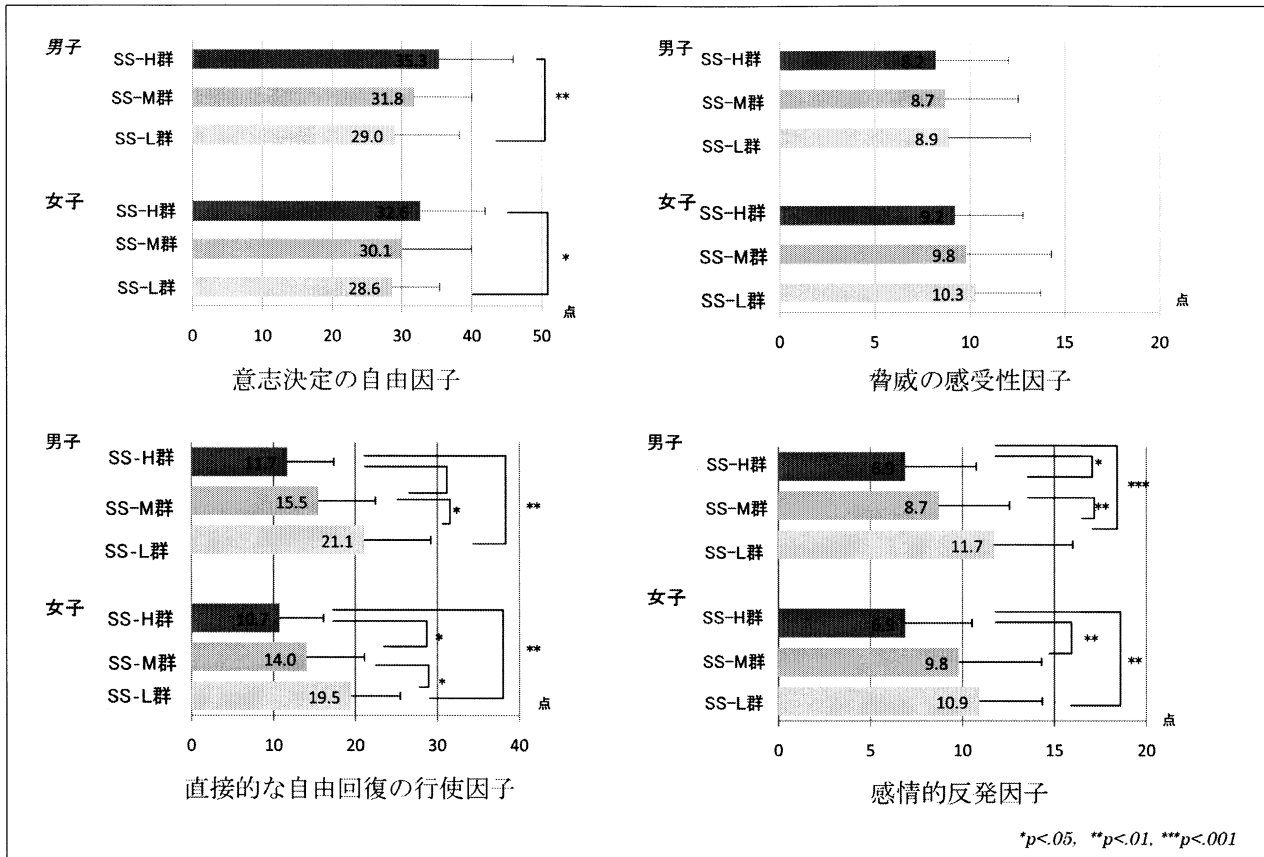


図3 社会的スキル各群別にみた心理的リアクタンズ下位因子の比較

=20.22 (p=.00)], 女子[F (2,173) =8.72 (p=.00)]とも有意差がみられ、多重比較の結果から、男子においてLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意に得点が高く (p=.00) (p=.01), Middle群はHigh群よりも有意に高かった (p=.00)。女子においてもLow群はHigh群よりも有意に得点高かった (p=.00)。

これとは逆に、「意思決定の自由」については、男子[F (2,187) =20.22 (p=.02)], 女子[F (2,173) =13.72 (p=.04)]で有意差がみられ、多重比較の結果から、男子においてLow群はHigh群よりも有意に得点が低く (p=.01)、女子においてもLow群はHigh群よりも有意に得点が低かった (p=.036)。

一方、「脅威の感受性」については、男子[F (2,187) =3.24], 女子[F (2,173) =3.06]とも有意差がみられた。多重比較の結果は、男子においてLow群はHigh群およびMiddle群よりも有意差がみられなかった。

IV. 考察

本研究の目的は、社会的スキルと攻撃受動性および心理的リアクタンズがどのように関連しているかを検討することにあつた。

本研究で得られた社会的スキル尺度、攻撃受動性

尺度の得点をこれまでの研究結果と比較した。社会的スキル尺度の「合計得点」は学年間に有意差がみられ、原ら (2006)³⁾の中学生を対象とした調査と同様の結果であった。一方、男女間においては有意差がみられ、女子の方が男子よりも社会的スキルが有意に高かった。この結果から、本研究の対象者は、女子の方が男子よりも社会的スキルが高い可能性があると考えられる。中学生の社会的スキルについて研究した原ら (2006) や清水ら (2009) の調査結果でも、女子の方が男子に比べて、社会的スキルが高いことが報告されている^{3) 16)}。このことについて、庄司 (1991) は、「女子は同性の集団が多いため、次第に対人行動が集団内で同質化される」と報告しており¹⁷⁾、女子は日頃から周りに合わせて行動しているため、男子に比べて、社会的スキルが自然に身につけていると推察される。

次に、攻撃受動性尺度の「合計得点」をみたところ、学年間において有意差がみられ、1年生の方が2年生よりも得点有意に高かった。このことから、本研究の対象者は1年生の方が2年生に比べていじめを受けやすい傾向にあると考えられる。この結果は、原ら (2006)³⁾の先行研究と異なる結果であった。この1つの要因としては、調査時期の違いが考えられる。先行研究では調査時

期が4月の中旬から5月の上旬にであった。これに対し本研究の調査時期は、11月下旬であり、1年生も学校生活に慣れてきた時期であるため、結果に違いが生じた可能性がある。実際に、文部科学省の「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査（平成23年度）」においては、学年別のいじめの認知件数は、1年生の方が2年生に比べて多いことが報告されている（1年生15260件、2年生10652件）¹⁸⁾。一方、男女間においては、有意差がみられなかった。この結果から、いじめは男女とも起こるものであると考えられる。Baronら（1994）は「男子では直接的な身体攻撃、女子では仲間はずれなどの間接的な攻撃方法を用いられることが多い」と報告しており¹⁹⁾、いじめの方法は異なるものの、性差に関わらずいじめは起こりうるものであると考えられる。

このような対象者について、社会的スキルをHigh群・Middle群・Low群の3群に分けて攻撃受動性との関連を見たところ、男女ともに「合計得点」および下位因子の「直接的な攻撃受動」、「間接的な攻撃受動」において有意差がみられた。これに加え、男子は「勉強志向・競争心」にも有意差がみられた。

まず、「合計得点」をみると、男女ともに社会的スキルが低い者は高い者に比べて、得点が有意に高かった。これは、社会的スキルが低い者は、いじめを受けやすい傾向があることを意味しており、原ら（2006）³⁾の先行研究と同様の結果が得られた。相川（1999）は「社会的スキルが低い者は、周囲と上手くコミュニケーションがとれず、孤立化してしまい、いじめの標的にされやすい」と述べており²⁰⁾、今回の結果を裏づける結果であった。

次に、下位因子である「直接的な攻撃受動」および「間接的な攻撃受動」と社会的スキルとの関連についてみると、男女ともに社会的スキルが低い者は高い者に比べて、得点が有意に高かった。「直接的な攻撃受動」とは「皮肉を言われる」「大声で怒鳴られる」など、相手から言葉などで直接受ける攻撃である。「間接的な攻撃受動」とは、「まわりからうっとうしく思われていると感じる」や「陰口を言われている気がする」など、他者の言動から自分が感じとる攻撃である。つまり、男女ともに、社会的スキルが低い者は攻撃内容に関係なく、攻撃を受けやすいと推察される。

これに加えて、男子における「勉強志向・競争心」では、今回の対象者は社会的スキルが高い者の方が、攻撃受動性の得点が有意に高かった。下位因子である「勉強志向・競争心」は「勉強のために、友人関係を犠牲にすることがある」や「テストで

は少しでもいい点をとりたい」など、学業に関する競争心の高さをみる項目である。相川（1999）は、「社会的スキルと学業成績とは関連がある」と述べており²⁰⁾、社会的スキルが高い者は、友人をライバルとして学業にも打ち込む可能性があると考えられる。

続いて、社会的スキルをHigh群・Middle群・Low群の3群に分けて心理的リアクタンスとの関連を見たところ、男女ともに「合計得点」および下位因子の「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「感情的反発」において有意差がみられた。この結果から、社会的スキルと心理的リアクタンスには何らかの関わりがあることが認められた。そのため、さらに詳細に関わりを見たところ、社会的スキルが低い者は高い者に比べて心理的リアクタンスの「合計得点」、さらに下位因子の「直接的な自由回復の行使」、「感情的反発」の得点が有意に高かった。今回の尺度は、「人から言われたことに反対したくなる」、「人からやれと言われたことはあえてやらない」など相手に対する反発的な質問事項がみられた。そのため、社会的スキルが高い者は、対人関係において衝突を回避し、心理的リアクタンスは喚起されにくい可能性があるかと推察される。加えて、社会的スキルが高い者の心理的リアクタンスが低かったことに対しては、対人関係を良好に保つために、ピアプレッシャーを受けた際、周囲に合わせてしまい心理的リアクタンスが喚起されにくいからではないかと推察される。

しかし、心理的リアクタンスの下位因子である「意思決定の自由」は、男女ともに社会的スキルが低い者は高い者に比べて、有意に得点が高かった。「意思決定の自由」とは、自分の自由への干渉に対する項目である。社会的スキルが高い者は、自分の意思を貫くのではなく、周囲の意見に合わせてしまうため、心理的リアクタンスの得点が低くなったと考えられる。このように、社会的スキルと心理的リアクタンスとは因子によって関わり方が異なっており、今後さらに詳細に検討する必要がある。

V. 結論

本研究は、社会的スキルと攻撃受動性及び心理的リアクタンスがどのように関連しているかを検討するために、千葉県の中学生336人を対象にアンケート調査を行った。主な結果は、以下の通りである。

- 1) 社会的スキルと攻撃受動性との関連に関しては、男女ともに社会的スキルが低い者は高い者

に比べ、攻撃受動性の「合計得点」および下位因子の「直接的な攻撃受動」、「間接的な攻撃受動」の得点が有意に高く、攻撃を受けやすいことが示唆された。これに加え男子は、社会的スキルが高い者は低い者に比べ、「勉強志向・競争心」の得点が有意に高かった。

- 2) 社会的スキルと心理的リアクタンスとの関連については、男女ともに社会的スキルが低い者は高い者に比べ、リアクタンス尺度の「合計得点」および下位因子の「直接的な自由回復の行使」、「意思決定の自由」、「感情的反発」、「脅威の感受性」の得点が有意に高かった。これに対し、心理的リアクタンスの下位因子である「意思決定の自由」のみは、社会的スキルが高い者は低い者に比べて有意に得点が高かった。

以上のことから、社会的スキルと攻撃受動性との関わりからは、社会的スキル教育がいじめの予防につながるもだと考えられる。心理的リアクタンスとの関わりからは、未成年者自らが危険行動を回避するような動機を高めることに加え、相手の気持ちを考慮しながらピアプレッシャーに対応する必要性が示唆された。

VI. 参考文献

- 中央教育審議会編集 (2008) 子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について (答申)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/08012506/001.pdf, Accessed January 10,2013
- 文部科学省編集 (2012) 児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査平成23年度
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/1325751.htm, Accessed January 10,2013
- 原由梨絵, 村松常司, 他 (2006) 中学生の攻撃受動性とセルフエスティーム, 社会的スキルに関する研究, 学校保健研究, 48 : 158-174
- Olweus D (1993) Victimization by peers ; Antecedents and long-term outcomes. In Social withdrawal, inhibition and shyness in childhood, K.H. Rubin, & J.B. Asendorf, (eds.) , Hillsdale, N.J. Erlbaum:315-343
- 野津有司, 渡辺正樹, 他 (2006) 日本の高校生における危険行動の実施および危険行動間の関連-日本青少年危険行動調査2001年の結果-, 学校保健研究, 48 : 430-447
- 山田浩平, 朝野聡, 他 (2012) 対人葛藤場面での断り行動に対する自己効力感と社会的スキル及びアサーティブな態度, ユーモア対処との関わり, 学校保健研究, 54 : 203-210
- 保坂亨 (1998) 児童期・思春期の発達, 教育心理学Ⅱ発達と臨床援助の心理学 (下山晴彦編), 東京大学出版会
- 牧野幸志 (2000) 心理的リアクタンスにおよぼすユーモアの効果, 高松大学紀要, 34 : 43-52
- Schinke,SP.,Botvin,G.J.etc (1991) Substance AbuseinChildrenandAdolescentsEvaluation andIntervention,SagePublication,NewburyPark
- 仲田洋子 (2009) 友だち関係をつくる——いじめ予防のために ソーシャルスキル教育をいじめ予防に生かす (学校における「心理教育」とは何か) - (学校における心理教育の実際), 児童心理, 63 (15) : 78-84
- 菊池章夫 (1998) 社会的スキルのこと スキルということ, 思いやりを科学する (菊池章夫著), 川島書店 : 187
- 大坊郁夫 (2005) 第1章 社会的スキル・トレーニングの概念と方法, 社会的スキル向上を目指す対人コミュニケーション (大坊郁夫編著), ナカニシヤ出版 : 3
- 渡辺弥生, 山本弘一 (2003) 中学生における社会的スキルおよび自尊心に及ぼすソーシャルスキルトレーニングの効果-中学生および適応指導教室での実践, カウンセリング研究, 36 (3) : 195-205
- 戸ヶ崎泰子, 岡安孝弘, 他 (1997) 中学生の社会的スキルと学校ストレスとの関係, 健康心理学研究, 10 (1) : 23-32
- 高木雪子, 吉見恒平, 他 (2005) リアクタンス特性尺度の検討, 広島大学心理学研究, 5 : 51-68
- 清水康太, 川尻直, 他 (2009) 中学生の攻撃受動性及び攻撃性と社会的スキルとの関連, 東海学校保健研究, 33 (1) : 53-57
- 庄司一子 (1991) 社会的スキル尺度の検討 - 信頼性・妥当性について -, 教育相談研究, 29 : 18-25
- 文部科学省編集 (2012) 平成23年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」について : 28
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/24/09/_icsFiles/afieldfile/2012/09/11/1325751_01.pdf, Accessed

December 27,2012

- 19) Baron RA, Richardson DR (1994) Human Aggression (2nd), Plenum Press, New York and London
- 20) 相川充 (1999) 第1章ソーシャルスキル教育とは何か, ソーシャルスキル教育で子どもが変わる 小学校 楽しく身につく学究生活の基礎・基本 (小林正幸, 相川充編著), 図書文化社:14

謝辞

稿を終えるにあたり、本調査にご協力頂いた千葉県内の中学生の方々に心より感謝申し上げます。本研究は、第一、二筆者が研究を行い、第三筆者が指導をした2012年愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を加筆・修正したものです。